

## ひとり暮しに思う

先日ご門徒の93歳の女性、Sさんが亡くなりました。

Sさんは結婚して、娘さんが一人ありましたが、ご主人にも娘さんに先立たれ一人で暮らしておられました。

去年の11月ごろに、Sさんの後見人だという司法書士の方から電話があり、今病院に入院しており、もう何にも持たない状態であること、お墓のことや、お葬式について尋ねられ、亡くなった後は後見人に全て任されているということでした。

お通夜とお葬式は、自宅近くの小さな葬儀斎場で営まれ、十何人かのお見送りがありました。涙を流される人もあり、生前のSさんの人柄が偲ばれました。

私は火葬上での灰送勤行まで勤めました。遺骨は、火葬場の近くのお寺に納められるとのことでした。

私が今のお寺に入寺した頃は、Sさんの家にはお寺から遠いこともあり、命日のお参りに行っておりませんでした。報恩講には必ずお参りに来ておられました。ご本山や、別院、お寺の修復の時にはいつもご寄付をしてくださいました。

2年位前にSさんがお寺に来られ、「自分が亡くなった後は、誰も見てくれる人がないのでお寺で供養してもらえないか。」というご相談があり、永代経を上げていただきました。その後、半年位してから電話があり、お仏壇でお参りして欲しいと言われ、初めてご自宅のお仏壇でお参りさせていただきました。その時に「またいつでも電話をしてくださいね。」とあって別れましたが、それが最後になってしまいました。

昨年は、「無縁社会」ということが問題になりました。ひとり孤独に亡くなり、引き取り手がいない死を「無縁死」と呼び、「無縁死」が年間3万2千人にのぼると報告されていました。

単身世帯が増えて、家族や地域、会社でのつながりが薄れるほか、「無縁死」は決して他人事ではなく、誰にでも起こりうることでないでしょうか。

「地獄」のことを、「我、今帰する所なく、孤独にして同伴無し」と教えられました。自分の本当の居場所がない、孤独で苦楽を共にする人が居ないということでしょうか。

私たちはつながりなしでは生きていけません。お互いに迷惑をかけ合い、それを許し合う場があってこそ生き生きと生きられるのでしょう。

生前のSさんには、訪れる人もあり、車に乗せてくれる人でもあったようです。今思えば、私はSさんから大切なご縁をいただいていたのかもしれませんが。最後にお会いした日から一度もSさんを訪れていかなかったことが悔やまれます。